1990年代ペルーの政治過程分析に向けた予備的考察

第1期目のフジモリ政治を見る二つの視角

Analysis of the Political Process of Peru in the 1990s

Two Perspectives on the Politics under Fujimori

村上　勇介*

MURAKAMI Yusuke

キーワード：政治過程，政党，民主主義，ペルー政治，フジモリ

KEY WORDS: political process, political parties, democracy, Peruvian politics, Fujimori

Este artículo revisa los principales estudios sobre el proceso político peruano de la década de los años 90 y señala que en muchos casos, los analistas no dan mucha importancia a los problemas de los partidos políticos que son abordados y cuestionados cuando analizan la política peruana del decenio de los años 80. Para señalar esta tendencia de los estudios existentes, este artículo enfoca el proceso político peruano en el primer período presidencial de Alberto Fujimori y examina los análisis y argumentos presentados por Cynthia McClintock y Julio Cotler.

En el primer capítulo, vemos cómo los dos estudiosos analizan el proceso político desde la elección de Fujimori en el cargo de presidente de la República en 1990 hasta el llamado autogolpe protagonizado por el mandatario peruano en 1992. En el análisis referido al proceso de 1990 a 1992, tanto McClintock como Cotler resaltan la actitud unilateral y autoritaria de Fujimori sin detallar la posición y acciones de los partidos políticos.

En el segundo capítulo analizamos que el autogolpe fue el resultado de la interacción entre dos actores políticos de carácter autoritario, Fujimori y los partidos políticos, referiéndonos a algunos acontecimientos que no resaltan o no toman en consideración los analistas de la perspectiva del unilateralismo fujimorista como los investigadores mencionados.

En el tercer y último capítulo, sostenemos que McClintock y Colter analizan profundamente las fallas de los partidos políticos en la década de los 80 y, sin embargo, sobredimensionan la capacidad democrática de los partidos políticos cuando tratan la política peruana después del autogolpe.

＊地域研究企画交流センター助手　Associate professor, JCAS

はじめに

民主主義を，個人や自発的結社が代表選出と意思決定の過程に自由に参加することがルールや行動定型として保証あるいは共有されている政治という手続き的な意味で捉えるならば，ペルーの民主政治は1990年代に大きく揺らいだ。民主主義の定着という観点からすれば，むしろ後退したと言っても差し支えないだろう。

ペルーで政治参加に関する法的制限が撤廃され，民主政治の体裁が整えられたのは，12年間続いた軍政が民政へ移管した1980年である。この年，それまで参政権が認められていなかった非識字者にこの権利が与えられ，政治への自由な参加が法的に保証された。そして80年代には，中道右派の人民行動党（AP, Acción Popular），中道左派のアプラ党（PAP, Partido Aprista Peruano），右派のキリスト教人民党（PPC, Partido Popular Cristiano），左派の統一左翼（IU, Izquierda Unida）の4政党による政党政治が展開し，選挙による民主的な政権交代も見られ，AP・PPC 連合と PAP が政権を担当した。

1980年代，表面的には民主的な政党政治が展開したが，その一方では市民の政党不信，政党離れが起きた。80年代のペルーは，超高率インフレ，不況，経済のインフォーマル化，失業・貧困の深刻化，所得再配分やサービス提供などの国家機能の低下，軍・警察・司法権を含む国家機関でのモラルの低下と汚職の蔓延，テロの拡大，国際金融社会からの孤立など困難な諸問題に直面し，次第に危機的状況に陥った。これらの問題に対処できなかった政党に対し市民は失望したのであった*1。

政党不信や政党離れが進む中，1990年の大統領選挙では80年代の政治を支えた政党とは無関係だった独立系（independientes）の候補，アルベルト・フジモリ（Alberto Fujimori）が大統領に当選した。当選したフジモリはペルーを建て直すため，国際金融社会への復帰，経済安定化・構造調整政策，経済自由化，テロ対策などを次々と推進した。その実施は事前の政治的合意に基づくのではなく，フジモリの決定やイニシアティブで進められ，具体的な成果をあげることで国民の支持を得た。92年には，民政移管とともに発効した79年憲法を停止し議会や司法府を閉鎖する「自主クーデタ」(autogolpe) を敢行し，世論調査で70パーセント以上という高い支持を受けながら8カ月間の独裁政権を敷いた。ここに12年間続いた民主政治の枠組みは脆くも崩れた。

「自主クーデタ」による事実上の政府という異常事態を収拾するため制憲議会選挙が実施され，フジモリ派が多数を占めた制憲議会で新憲法が起草された。国民投票を経て1993年に公布された新憲法では，それまで禁止されていた大統領の連続再選が一度

＊1　1988年から89年に行われた政治意識調査で，政党に属していると答えた有権者は全体の5パーセントのみで，政党を信用しないと答えた有権者が4分の3に達した［Torres 1989: 58-59］。89年の地方選挙では，政党系の候補をおさえた無所属・独立系の候補がリマ市長に当選した。ペルーでの政党離れは90年代により進み，95年と2000年の大統領選挙で，80年代に政治を支配した4政党の得票率の合計は5パーセントに届かなかった。

に限り認められ，フジモリは95年に再選された。再選されたフジモリは翌96年，90年から95年の大統領任期は93年憲法で規定された大統領任期の第1期目にはあたらないとする憲法解釈法を強引に国会で成立させ，2000年の大統領選挙でフジモリ自身が三選を目指すことができるようにした。この解釈法は国論を二分する議論を巻き起こし，フジモリの三選立候補の合法性についての合意がないまま，2000年に大統領選挙が実施される事態となった*2。

こうした1990年代のペルー政治の展開について，従来の研究では，フジモリの一方的な決断や行動，非妥協的な姿勢を指摘し，その権威主義的な性格が民主主義の定着に逆行すると批判するものが支配的である*3。確かに，フジモリは「実行してから報告する（primero hacer y después informar）」ことをモットーに，合意形成や過程，手段にはこだわらず，政策課題に対する成果を効率的に出すという政治スタイルで，ごく少数の側近との間で迅速に意思決定を行い実行に移す権威主義的な政治を常に行ってきた。意思決定過程への市民の民主的な参加を可能にする政治的磁場・アリーナを形成する努力はしなかった。この点で筆者はフジモリの行動や姿勢を批判的に検討することに異論はない。

しかし同時に，フジモリの一方的な決定や態度に注目し，これを批判的に検討するだけでは不十分であると考える。それは一つには，1990年代ペルーの政治過程を分析する際，フジモリ以外の政治的アクターの問題，具体的には，説得的な政策を提示できる民主的な反対勢力の不在という問題が忘れられているからである。これまでの支配的な見方を提示した研究は，90年代のペルー政治の背景として80年代に政党が抱えていた問題に触れる場合もあるが，フジモリ政権において野党勢力となった政党が，90年代の政治過程にどう関わり，フジモリの認識にどう影響したのかなどの点までは分析していない。あたかも政党は権力闘争への関心を失い，その行動や姿勢は中立的で政治動向に何の影響も与えなかったかのようである。中には，政党関係者の証言に

＊2　2000年選挙の経緯やその後のフジモリ罷免などの状況については，村上［2000］を参照。本稿で扱えなかったが，民主政治の脆弱化との関係では，フジモリ政治の展開において軍の影響力が拡大した点も見逃すことはできない。テロ対策を進める上で重要な役割を担った軍は，政党のような独自の支援組織を持たないフジモリを支える柱として国家機構の中で影響力を強めていった。

＊3　フジモリの一方的行為を重視する研究には，Abad y Garcés［1993］, Adrianzén［1992a］, Ames［1992］, Bowen［2000］, Cameron［1994；1997；1998］, Cotler［1993；1994］, Lauer［1994］, López［1992；1993a；1993c］, Lynch［1992b；1999］, McClintock［1993；1996；1999］, Paniagua［1992］, Pease［1994］, Planas［1992；1996］, Quijano［1995］, Revesz［1996］, Rospigliosi［1994；1996］, Sagasti and Hernández［1994］, Stokes［1996a］, Tuesta［1995］, Á. Vargas Llosa［1993］などがある。また以下で述べるフジモリと政党勢力の間の相互作用を強調する立場には，Béjar［1992］, Kenny［1996］, 村上［1994a］, 遅野井［1993b；1995］, Rubio［1992］などがある。López［1992：24, 27；1993c：30］や Rospigliosi［1994］, Sagasti and Hernández［1994］, Tuesta［1995：45, 95, 121, 131-134］などは1990年代の一般的背景として政党の諸問題に言及しているが，憲法停止措置に至る過程の具体的な分析ではこの視点が生かされず，フジモリによる一方的行動から説明している。アリアスはフジモリの一方的行為に憲法停止措置の責任を求めながら，別の箇所では政党勢力にも責任があったと述べ，矛盾している［Arias 1994：53-58, 145］。また，一般的にフジモリの一方的行為を批判するリンチは，政党の問題を検討した95年の論文で，92年の憲法停止措置以外に解決策があったのかという自ら発した問いに対し曖昧にしか答えていない［Lynch 1995：92］。

のみ依拠し，政党が善意で行動したと指摘する研究も存在する。政党の行動や姿勢にも批判的な検討が加えられるべきである。

支配的な視角が持つ別の限界として，1990年代のペルー政治には，フジモリの行動や姿勢にとどまらず，より深い構造的，歴史的な問題が横たわっている点が見落とされていることを指摘しなければならない。ペルー政治が抱えてきた構造的，歴史的な問題を単純化すれば，政治が有力者を中心とする集団の形成とこれらによる対立の場と化し，妥協や交渉による合意や共通の目標の形成といった行動が定型化，制度化されず，長期にわたり存続できる民主的な政治空間が醸成されてこなかったことである。中長期的な合意や共通の目標がない中で，権力闘争が激化し政治が行き詰まり，軍の介入が繰り返されてきた。この視点からすれば，フジモリの態度や行動は全体的な問題の一部に過ぎなくなる。

この二番目の点はいわゆる「民主化」論が惹起する問題と関連する。1970年代末からラテン・アメリカ各国で相次いだ軍政から民政への移管が多くの研究者の関心を呼び，80年代半ばから「民主化」論として様々な研究が提出されてきた。90年代に問題の関心は民政移管の過程自体の分析から，民主政治の構築や安定化の諸条件の分析へと重点が移った。

しかし，こうした「民主化」論の展開は，必ずしも政治社会構造や歴史的背景を視野に入れた政治分析に結びつかなかった。分析の焦点と関心は民主化をめぐる政治的アクター間の短期的な交渉や駆け引きの分析に集中し，政治社会の歴史や構造を度外視した「民主化マニュアル」と化している研究も見受けられるのである。民主政治の定着のため現在求められているのは，政治社会の構造的諸条件を視野に入れた研究の方法を探ることであり［出岡　1993；恒川 1993］，筆者の究極的な関心もそこにある。歴史的，構造的な条件に目を向けることで，ラテン・アメリカ諸国の政治社会を比較する視角が構築されると考えるからである。歴史・構造的な視点から見て重要なのは，政治的アクター自体の問題に加え，政治的アクター間でどのような関係，ルール，枠組みが形成されているか，ないし形成されていないか，という点である［出岡 1993；Rueschemeyer *et al.* 1992；恒川 1993］。

以上の問題意識の下，本稿はフジモリの行動や姿勢の分析に重点を置き過ぎてきたこれまでの支配的な解釈を批判的に検討し，1990年代におけるペルーの政治過程を分析する別の視角を提示する試みである。フジモリ当選から憲法停止措置までの過程を主な事例として取り上げ，90年代のペルー政治を分析するための視角を探る予備的な作業を行う。

まず，憲法停止までを考察した従来の支配的な見解では，フジモリが議会で少数与党だった時期であるにもかかわらず，前出の4政党ならびにこれらから派生した小政党の野党勢力（以下，政党勢力と呼ぶ）の行動や姿勢が具体的に分析されていない点を明らかにする。最初にフジモリの一方的な姿勢や行動を重視する既存研究の支配的な解釈を概観した後，政党勢力の政治行動も考慮した別の解釈を示す。後者では，フジモリと政党勢力の間で対立が次第に激化し，政治が分極化していった帰結として憲法停止措置が捉えられる。

続いて，憲法停止措置に至る過程でフジモリの一方的行為に注目する研究者が，実は，政治勢力の間で対話や合意を基盤とする民主的な政治空間が形成されない現象は歴史的，構造的な問題として1990年代以前にも存在したことを説いていた点を指摘する。そして最後に，これらの研究者が憲法停止措置後の政治過程に関し，政党勢力による政治行動の内実を十分に分析せずにこれを過大評価したことに言及する。

既存研究の支配的な見解と言っても細かく見ればニュアンスを異にする様々な研究が存在する。本稿は，ペルーとアメリカ合衆国の代表的な研究者，フリオ・コトレル（Julio Cotler）とシンシア・マクリントク（Cynthia McClintock）の所説に注目する。これは，両者が民政移管から憲法停止措置後までのペルー政治について一連の研究を発表しており，前述の政党勢力をめぐる視点において非一貫性が明確に観察されるためである。特にコトレルの場合，1980年代までは政党の問題を含めペルー政治の伝統と構造について深く掘り下げた研究を行っていたことからすれば，90年代初めの憲法停止措置に至る過程に関する分析の中で政党勢力の行動や態度を取り上げていないのは奇異にさえ思われる*4。

なお，1990年の選挙過程や社会状況について述べる余裕はないが，(a) 右派系政党連合の擁立した大統領候補の当選が確実視されていたものの，選挙戦の最終段階で確固たる組織的基盤のないフジモリが急速に支持を伸ばし当選したこと，(b) 国会議員選挙では80年代に政治を担った政党勢力が上下両院で過半数以上を占めたこと，(c) 政党勢力への信頼を失っていった民衆は自助努力により生き残りを図る中，社会的には個別的，限定的な小集団しか形成せず，ペルー社会の原子化（atomización）が進んでいたこと，の三点を一応の理解としておく*5。

Ⅰ．憲法停止措置に至る過程に関する支配的な解釈

フジモリ政権の誕生から憲法停止措置までの過程を分析した従来の研究では，フジモリによる権威主義的な政治の帰結として同措置を捉えるものが支配的である。

＊4　コトレルはペルー問題研究所（Instituto de Estudios Peruanos）研究員，元所長で，ペルー政治分析の草分け的存在である。Cotler［1978］は現代ペルー政治研究の必読書となっている。マクリントクはジョージ・ワシントン大学教授で，ペルーの軍事政権や民主政治，政治暴力について研究を行ってきた。本稿のレフリーからのコメントで，コトレル，マクリントクともに反フジモリ政権の立場を明確にする研究者であり，他方，筆者が支配的解釈を批判する際に依拠するのはフジモリ政権の関係者であって，ペルー政治の当事者たる彼らの分析や批判がどこまで客観的となるかが問われる旨の指摘を受けた。筆者には，存在の被拘束性を持つ当事者や研究者の見方，分析を批判的に検証することを通じそこに含まれる部分的な真実を発見し，これを部分像として組み合わせることで研究対象の全体像を把握できるのではないかというカール・マンハイムの考えが基本にある。本稿は，コトレルやマクリントクなどの研究でも，またフジモリ政権関係者の意見や分析でも，部分像として適切であると判断されるものを取り入れている。確かに本稿は，これまでの支配的な見解がフジモリ側の証言を全く考慮していない点を正すべきであるとの考えから行論していることは事実だが，フジモリ側の主張が全て正しいと判断しまたそう主張しているわけではない。

＊5　1990年選挙については，Daeschner［1993］，Degregori y Grompone［1991］，González［1993］，Jaime［1991］，遅野井［1991；1995］，Rospigliosi［1992］，Salcedo［1990］，Salmón［1994］，Schmidt［1996a；1996b］，Valentín［1993］，Á. Vargas Llosa［1991；1993］，M. Vargas Llosa［1993］などを参照。

こうした研究が憲法停止措置の原因として指摘するのは，フジモリと軍，財界，国際金融機関（ないしこれと密接な関係を持つテクノクラート）などの「実権力」(poderes fácticos) との連合である*6。組織的基盤を持たず議会でも少数与党だったフジモリが，大統領当選後に国際金融機関や軍，財界の考えや意向，利害を代弁したことから，フジモリとこれらの「実権力」との連合が生まれたと捉える。フジモリは，この連合を基礎に「国家を救済する」(salvar el Estado) ための一貫した戦略を追求し，選挙運動中には反対した均衡財政，経済安定化，構造調整，経済自由化などの新自由主義的な (neoliberal) 経済政策を大統領就任直後からとり，他方で軍・警察の役割を重視したテロ対策を実行した*7。そして必要と判断した時に立憲体制を崩したと分析する [Cotler 1994: 14-15, 200-201]。

また，従来の支配的な見解には，憲法停止措置の要因を，権力を集中させ一切の交渉を拒否するフジモリの権威主義的な性格や意図に求める研究も存在する。この見方によれば，権威主義的なフジモリは構造的機会 (oportunidad estructural) を利用した。構造的機会とは，前述の市民の政党不信，政党離れが進んでいた状況を指す。これに乗じフジモリは絶対的な権力の獲得と1979年憲法が禁じていた大統領の連続再選を可能とすることを企図したという。その傍証として，(a) フジモリが大統領就任直後から，政党指導者に尊大な態度をとったこと，(b) 司法府や議会，官僚機構などを非能率であるとか腐敗していると強く非難したこと（「正義の殿堂」(Palacio de Justicia) として知られる最高裁判所を「不正義の殿堂」(Palacio de Injusticia) と呼んだことなど），(c) 軍の昇進や退役に強い関心を示したこと，などをあげる。そして，フジモリは90年の大統領就任直後から憲法停止措置を考えていた可能性すらあると指摘する [McClintock 1993: 114-115; 1996: 55-60, 65-66]。

憲法停止措置までの過程についての支配的な見解は，1991年11月までは，議会の多数派となった政党勢力からさしたる妨害も受けずに，フジモリが経済自由化や経済構造改革，国際社会への復帰，歳出削減，テロ対策などの諸政策を進めることができた

＊6　フジモリと「実権力」との連合はLópez [1992: 24-26; 1993c: 30] でも指摘されている。

＊7　軍との共謀という点を強調しフジモリは大統領就任時から憲法停止措置のチャンスを窺っていたとする分析もある [Cameron 1997: 50-62; Rospingliosi 1996; Á. Vargas Llosa 1993]。例えば，キャメロンによれば，憲法停止措置の計画自体は，深刻化したテロ問題に危機感を抱いた軍が既に1980年代末に密かに作成していた。文民大統領をその地位に置きながら軍が事実上のクーデタにより実権を掌握し，テロ対策を急速に進めるという計画である。この計画をフジモリが受け入れたのは，大統領に当選し就任するまでの間の90年6月，90年選挙で右派勢力を結集した作家のバルガス・ジョサ (Mario Vargas Llosa) の当選を期待していた軍がクーデタを起こす恐れが生じ，フジモリが当時の法律顧問で後に軍関係の顧問となるモンテシーノス (Vladiniro Montesinos) の助言に従い，リマ市内にある軍の施設に避難した時だったという。従って，後に政党勢力が見せた対話や交渉の姿勢をフジモリが拒否したのは当然のことだった。またキャメロンは，経済政策をめぐる対立やガルシア前大統領の動向などは憲法停止措置の主要因ではないと断言する。だが，仮にキャメロンが言うように軍内に90年当時，憲法停止措置の計画が存在したのが事実だとしても，この時に大統領レベルの政治的な決定としてこの計画が採択されたことを自動的には意味しない。この点はII章で述べる。

と主張する。それは，市民からの信頼を失っていた政党が政治勢力として弱体化していたことに加え，経済については緊急大統領令（decreto supremo de emergencia, 議会に報告するだけで経済と財政について法令を公布できる憲法上の大統領権限）が使えたこと，および右派系政党（AP, PPC など）がフジモリの経済政策を支持したためであるという*8。

同時に，1991年11月までにフジモリは政党勢力と連合することができたのに，これを拒否した点が指摘される。例えば，新自由主義的な経済政策が PAP や IU など90年の大統領選挙でフジモリを支持した左派系勢力の反発を招く一方，右派系政党の支持を得た時である。しかし既に「実権力」と連合していたフジモリは，これを皮切りに右派系政党と安定的な連携関係を結ぶことには関心がなかったと分析する［Cotler 1994：201-202］*9。

従来の主要な研究がフジモリと政党勢力の対立が激しくなる契機として重視するのが，1991年11月の委任立法令（decreto legislativo）の大量公布である［Cotler 1994：207；McClintock　1996：62-63］。委任立法令とは，議会が行政府に特定分野の立法権限を委任し，これに基づき後者が公布する法令である。問題の委任立法令は，同年5月に雇用創出，民間投資促進，テロ対策の三分野に関し議会が政府に付与した委任立法権に基づいて公布されたもので，11月下旬に付与期限が切れることになっていた。政府はこの委任立法権を使って117の法令を公布したが，そのうちの83が11月に集中して出された*10。

政党勢力が特に問題としたのがテロ対策に関する委任立法令だった。国家により秘密と考えられた情報を報道機関が報じた場合に実刑を含む刑罰が適用されるなど，政党勢力は，多くの点で国家や軍の権限が強化されている点に反対した。これに対しフジモリは，テロの拡大に対する非常措置であること，および政党勢力が実効性のある代替案を持っていないことを主張し，委任立法令を擁護した。1991年11月末に政党勢力は議会で，テロ対策として出された委任立法令40のうち15を廃止ないし修正した。フジモリ側はこの廃止や修正で効果的なテロ対策の実行が不可能になったと強く反発した*11。

＊8　McClintock［1996：61-62］。さらに，政権発足当初は「政治的蜜月」で，議会が大統領に委任立法権を付与する傾向が1980年代に見られたが，フジモリにも当初は委任立法権が与えられたからだとマクリントクは指摘する［McClintock 1993：114-115］。

＊9　コトレルによれば，政党勢力が1991年7月末に議会の新議長団をコンセンサスで選出し，テロ対策に絡んだ人権侵害事件について議会が調査することを決めた時，政党勢力のこうした動きがフジモリとの摩擦を引き起こす一方，数名の野党議員がフジモリに，軍の行動と経済政策に一定の制限を付す代わりに議会で多数派を約束するという提案を行った。だが，フジモリは，野党議員の提案が「実権力」との連合に差し障る内容だった上に，既に憲法停止措置を決行する意図を固めていたことから，この提案を拒否したと指摘する［Cotler 1994：206］。91年後半の段階で数名の野党議員からフジモリに対し働きかけがあったことはコトレルのみが指摘している。この働きかけに関する評価は＊16を参照。

＊10　通常，この委任立法権により公布された法令は126といわれるが，ペルー政府によれば117である［El Directorio de Editora Perú, S.A. ed. 1991：7］。

＊11　委任立法令の分野別総数は各法令の序文に書かれた目的による機械的分類から算出されている。廃止・修正率は雇用創出に関する法令が14パーセント，民間投資促進のものが13パーセントだった［村上 1994a：35-36］。テロ対策に関する委任立法令の批判はRospigliosi［1996］，Tapia［1997］，Vidal coord.［1993］を参照。

その後さらにフジモリと政党勢力の間の緊張を高めた争点として，従来の支配的な見解は，「大統領立法行為統制法」(Ley de Control Parlamentario de los Actos Normativos del Presidente de la República)，1992年度予算，「農業緊急法」，農業大臣が受けた不信任決議，フジモリ罷免の可能性などをあげる［Cotler 1994：207；McClintock 1996：63-64］。

「大統領立法行為統制法」は，非常事態宣言（declaración de emergencia）や前出の緊急大統領令，外国との条約・協定など，憲法で認められた大統領権限により公布される法令を議会が無効にできるとした法律である。非常事態宣言の公布は治安維持の目的から大統領が行使できる権限で，同宣言が発動されると憲法に保証された基本的人権の一部が停止される。政党勢力は大統領権限の濫用を防ぐためとして，1991年12月上旬に「大統領立法行為統制法」を可決成立させたが，フジモリ側は憲法違反であると強く反発した。

1992年度予算をめぐっては，91年12月からインフレ抑制のため均衡予算を主張するフジモリと社会支援などの歳出の増加による財政赤字もやむなしとする政党勢力が対立した。前出の「大統領立法行為統制法」のため緊急大統領令の行使を制限されたフジモリは，緊急大統領令を使って赤字予算項目を執行停止にすることができず*12，政党勢力が議会で可決した予算を92年1月に入って受け入れるしかなかった。

「農業緊急法」は，農業の支援と復興を目的として1991年11月下旬に政党勢力が成立させた。フジモリは，補助金などから約3億ドルの財政赤字が出るとこの法律を非難した。農業大臣が受けた不信任決議とは，91年12月初め，ある講演で政党勢力を党派的と強く批判したフジモリが，ペルーにとって「もしかしたら皇帝（emperador）がいて，少なくとも10年の間，問題の解決にあたることが適切かもしれない」と発言し，これに憤慨した政党勢力による賛成で，「農業緊急法」に関連し農業大臣が議会から不信任決議を受けたことである。これは79年憲法下で初の閣僚に対する不信任決議で，憲法によれば同決議を受けた閣僚は辞任しなければならない。だが，フジモリは，憲法で大統領が不信任決議を受理する期限が定められていないことから，2週間にわたりこの不信任決議を放置した。

またフジモリ罷免の可能性は，マネーロンダリング取り締りのための委任立法令を政党勢力が廃止したことを発端に現れた。この法令はテロ対策の一環として麻薬マフィアからテロ組織への資金提供を断つことが目的だったが，1991年12月上旬，この廃止に憤ったフジモリがある演説で，麻薬マフィアから議会に対しロビー活動があるのかと発言した。フジモリ発言に反発した上院は，AP の議員が提出した「発言者を道徳的に不適格とする発言である」との動議を可決する。これは，議会が「道徳的に不適格」(incapacidad moral) と宣言すれば大統領は罷免されるとの79年憲法206条を念頭に置いた動議だった。下院では，

*12　II章第2項で見るように，前年の1991年にも翌年度の予算をめぐりフジモリと政党勢力が同様に対立したが，フジモリは緊急大統領令を使って赤字予算項目を停止していた。

PAP が同趣旨の動議を提案したが，フジモリの罷免がクーデタにつながる恐れがあるとして否決された*13。

以上の緊張関係の中でも政党勢力はフジモリに妨害的ではなかったと従来の支配的な見解は分析する。その理由は，非難決議を受けた閣僚は1名のみであること，また，廃止・修正された委任立法令も全体の4分の1に過ぎなかったことである。さらに，右派系の国会議員がフジモリと合意に達することに強い関心を持っていたとして，政党勢力はフジモリと交渉する用意があったにもかかわらず，フジモリの方がこれを拒否したと指摘する。フジモリが拒否した理由は，政党勢力との合意が議会での安定的な過半数をもたらす反面，フジモリの権力を制限し，同時に1995年の大統領選挙に立候補する道を閉ざすことになるからだったという。そして，むしろフジモリは，政党勢力が委任立法令を否決しフジモリ政権を妨害しているとのイメージを作り，これを理由に憲法停止措置を正当化しようとして91年11月に強権的な委任立法令を公布したとさえ考えられると述べる［McClintock 1996：64］。

政党勢力が示した合意への意欲として従来の支配的な解釈が重視するのは，フジモリと政党勢力の間の緊張が高まる1992年3月，右派系政党と憲法停止措置の実行について全く知らされていなかった当時の首相が非公式に協議し，テロ対策で政府側の提案をも組み入れた立法を行うことや，PAP の影響が強い最高裁判所と憲法裁判所の人事を刷新することで合意し，4月7日に両者を議会審議に付すこととなっていた事実である［McClintock 1996：64-65］。この合意の履行により，憲法停止を正統化する口実がなくなることを恐れ，議会審議開始前にフジモリは同措置を決行したという*14。

II．政党勢力の動向も考慮した視点

1．フジモリの政党不信

フジモリだけでなくもう一つのアクターである政党勢力にも着目し，両者の応酬と対立の帰結として憲法停止措置を捉える立場から見ると，従来の支配的な解釈は，

---

*13　この動議についてはAlva［1993：276-282］，Delgado［1992：44-46］も参照。これまで述べてきた以外の争点として，憲法裁判所の違憲判決もあげられる。これは，PAP 系の裁判官に支配された同裁判所が1992年2月から，フジモリ政権が公布した経済改革関連の諸法令に関し違憲判決を立て続けに出し始めたことで，過半数以上が PAP 系の裁判官だった最高裁判所で91年に不正蓄財容疑の訴追を逃れたアラン・ガルシア（Alan García）元大統領が，92年に入って始めた新自由主義経済政策批判運動の一環と捉えられた。

*14　コトレルは，テロ対策に関する委任立法令が政党勢力により修正・廃止された失敗を隠蔽するため，1992年2月，フジモリは議員と軍人がテロ対策に関する対話を行うことを認めたと分析する。そして，両者は歩み寄った形でのテロ対策に合意したが，フジモリはこれを実行に移すつもりはなかったと判断する［Cotler 1994：207］。また，コトレルの分析では憲法停止措置の直接的契機となったのは，92年3月末のスサナ・フジモリ大統領夫人による不正蓄財告発である。大統領夫人は，大統領の弟サンティアゴ・フジモリ大統領顧問などが日本から寄贈された古着を転売し不正に蓄財を行っていると告発した。政党勢力が議会を通じ調査に乗り出す危険を感じ，フジモリは憲法停止措置を命じたという［Cotler 1994：207-208］。実は，大統領夫人は大統領官邸で孤立していた上に，取り巻きに政党勢力関係者がいたため，事実無根の告発を行ったのだが，筆者があるフジモリに近い筋から聞いたところによれば，コトレルの分析とは異なり，憲法停止措置は92年3月末に実行が計画されていたが，大統領夫人の告発により少し後に実施が延ばされたという［Cインタビュー］。

1991年前半までと91年後半からとではフジモリと政党勢力との関係が質的に異なる点を捉えていないという限界を持つ。この点を示すため本章では憲法停止措置までの政治過程でフジモリによる一方的行為を強調する立場が見落としているいくつかの側面に注目する*15。

まず想起すべきは，フジモリに協力する積極的な姿勢や行動が政党勢力に最初からなかった点である。各党は共通の政策や一致点から協力する，あるいは現実的，具体的な代替案を示して合意形成を促す努力をせず，むしろ次期政権獲得や自らの勢力拡大を視野に入れ基本的にはフジモリの失政を待ったのであった。実際，憲法停止措置までの間，政党勢力は，経済政策やテロ対策など国家全体に係わる深刻な問題に正面から取り組んだ法律を制定する主導権を発揮したことがなかった*16。

例えば，大統領就任直後の1990年8月初め，フジモリが経済安定化のため，30倍のガソリン値上げなど政府からの価格統制補助の全額打切りを内容とするショック政策を発表した時である。国民はこれを冷静に受け入れたが，左派系は無論，右派系の政党も同政策への支持表明を行わなかった。フジモリが最初に組閣した内閣には3名の政党出身者（1名は AP で，2名が左派系）がいたが，その出身政党はいずれも政党としてショック政策への支持を決定しなかったのである。

この例から分かるように，右派系政党がいくつかのフジモリの政策を支持していたという既存研究の支配的な解釈は表面的である。確かに，経済政策やテロ対策に関し右派系政党の議員や指導者が個人として賛成を表明したことはあった。しかし，政党としてそれらを支持する決定をしたことはなかった点を見逃すべきではない。ショック政策をはじめフジモリが実施した経済の安定化や構造改革は，右派系政党が1990年の選挙運動で主張した政策であったが，それらは全て緊急大統領令，つまり行政命令として政府から出されたのである。こうした右派系政党の姿勢の背景には，90年の選挙で右派系政党連合の大統領候補が当選することを確信していたこれらの政党が終盤で形勢を覆したフジモリに妬みを持ってい

＊15　本章の基本的視点は村上［1994a］の議論に基づいている。Kenny［1996］は筆者の見解と共通する点が多いが，主に次の四点で異なる。(a) ケニーはフジモリが暫定的な争点連合を政党勢力の一部と組み，政党勢力の多数派の形成を回避しつつできる限り諸政策を実行し，その後，政党勢力が歩調を合わせフジモリに対抗する姿勢を見せ始めた時に憲法停止措置をとるための世論形成を図ることを考えたとし，フジモリが最初から合理的な見取り図を描いていたことを仮定しているのに対し，筆者はフジモリがむしろ状況や場面に応じ最善の対応を考えるスタイルで，憲法停止措置も同様だったと仮定していること。(b) フジモリが政党の一部と安定的な連合を組まなかったことに関し，ケニーは国民の信頼を失っていた政党と組むことでフジモリがイメージを落とし，支持を失う危険性があったこと，および「実権力」が左派系政党を信頼していなかったことを理由としてあげるが，筆者はこの点を認めつつも，より基本的にはフジモリの政党不信が根底にあったと考えること。(c) 筆者が1991年の政府と政党のテロ対策に関する対話やエクアドルの国境侵犯事件をめぐる政党の動きに注目していること。(d) 憲法停止措置の決定時期について，ケニーが不明としているが，筆者はフジモリなどの発言から91年12月中だったと考えていること。

＊16　ある政党系の元議員は，1990年には与党に上下両院の議長の地位を何の代償もなく与えたのにフジモリが政党への理解を示さなかったと指摘する［Cameron 1997：54］が，フジモリ側から見れば，深刻な諸問題を前に，政党勢力は議長を与党に与えること以外は何もしなかったのである。また，コトレルの指摘した「数名の議員」による提案が仮にあったとしても（＊9参照），政党としての公式提案でなかったことが限界だったと思われる。

たこと，ならびに，厳しい経済社会情勢を前に，組織的基盤のないフジモリ政権とその政策の行方に確信を持てず，これに係わることを嫌ったこともあったと考えられる*17。

政党勢力の消極的な姿勢はフジモリの政党不信を深めるだけだった。フジモリは当選後，ペルーが直面する「独立以来最大の危機」（大統領就任演説）を迅速に克服するため，「実権力」との関係を緊密にしつつ必要な改革や政策を進めようとした。最初に経済安定化を，そして1991年からはテロ対策を重視したが，深刻な諸問題に関する具体的な政策を提案しない非協力的な政党勢力は，フジモリにとって単なる障害でしかなかった。こうした政党のメンバーからなされた非公式の政治取引の提案は全て拒否したのだった*18。

フジモリの政党不信は，政党から離れた個々の一般民衆や小集団から直接的かつ個別的に支持を得たと1990年の選挙運動を通じて考え，自信をつけたことに起因すると考えられる。フジモリは政党政治が凋落する過程の中で頭角を現した政治家で，選挙運動では，個々の一般民衆や小集団の支持を得るのに，これらをまとめる中間媒介組織が要らないことを経験し，また原子化したペルー社会と直接的な関係を打ち立てることに成功したと認識していた。この認識からフジモリは政党組織への疑問および一般民衆との直接的関係を重視する「直接民主主義」的思考を持つようになったと言えよう*19。

ここでフジモリの政党不信を決定付けた一つの出来事に注目する必要がある。それは1991年5月に開始されたテロ対策に関する政府と政党勢力との対話である。約2カ月の間，政府と与党を含む13の政党がテロ対策について話し合った。だが政党から具体的な提案はなされず，その成果はテロ対策のため協力すると表明したわずか3行の声明が同年5月に発表されただけだった［Torres y Torres 1992：105-106, 157-160］。この対話は，後にテロ対策に関する委任立法令を政党勢力が廃止，修正したのに対し，フジモリが強く反発する伏線となった［Aインタビュー］が，この点は既存の研究では全く考慮されていない。

＊17　Tanaka［1998：209, 218］も同様の指摘をしているが，他方でいくつかの政党は経済構造調整政策やテロ対策に関しフジモリに協力的だったと記し［Tanaka 1998：62, 85］，記述が一貫していない。なお，ここで右派系政党と呼んでいる勢力は，1990年の選挙で民主戦線（Frente Democrático）という選挙連合を結成していたが，選挙終了後にこの連合が自然消滅したことから，本稿では民主戦線という表現を使っていない。

＊18　遅野井［1993b：212］に引用されている首相経験者の発言参照。なお，フジモリが議会を合憲的に解散し選挙を行い，議会の勢力構成を変えることは事実上不可能だった。1979年憲法で大統領に認められている権限は下院の解散権だけで，しかもこの解散権は三つの内閣が議会から不信任決議を受けた後でなければ発動できなかった。選挙になれば多くの議席を失うことが明らかだった政党勢力が不信任決議を三度可決するという自殺行為を行うことはあり得なかった［Kenny 1996：88-89］。

＊19　フジモリの政党不信は1990年選挙戦を通じて形成された。89年末の時点で，フジモリは90年選挙では政党勢力から大統領が誕生する，つまり自分の当選はないと考えており，政党を過大評価していた。この点について詳しくは，村上［1994a：29-30］参照。また，フジモリの政党不信は政党勢力との安定的な連合を拒否する姿勢にもつながる。フジモリの「直接民主主義」的志向は組織軽視の傾向を生み，自ら創設した政治運動のカンビオ（変革）90を大統領当選後，人的，組織的に強化しなかった。そのため，92年の制憲議会選挙，98年の地方選挙，2000年の大統領・国会議員選挙では，新たな組織を創設しカンビオ90と連合させ，これを補強せざるを得なくなった。

2．政治の閉塞化

非協力的な政党勢力に不信を抱くフジモリは1991年前半までにいくつかの争点をめぐり政党勢力と対立した。例えば，90年9月から10月に判決未定で収監され，科されるべき刑期を経過した者をフジモリが恩赦しようとしたのに対し，政党勢力が憲法上，大統領に恩赦権は認められていないと反対した。この問題は，政党勢力がフジモリの趣旨を汲んだ法律を成立させることで一応決着する。また90年12月から91年1月には，91年度予算をめぐり，均衡予算を主張するフジモリと結果的に予算全体を赤字にする修正を提案する政党勢力とが対立した。フジモリは憲法に定められた緊急大統領令を使い，政党勢力が修正した予算項目を停止するという，それまで誰も思いつかなかった手段を使って均衡予算をあくまでも貫いた。この新たな手法を覆す法的規定がなかったため，政党勢力はフジモリが公布した予算を受け入れるしかなかった。

また1991年2月，フジモリは政策決定を民主化するとして，大統領令案を事前に公布し広く国民から意見を求めることを一方的に提案したが，政党勢力はこの提案が議会審議の骨抜きを狙ったものであるとして反対した。この時，ある有力週刊誌は，政党勢力の一部議員がフジモリの罷免を検討し始めたと報じた［*Caretas* No. 1149 (4 de marzo de 1991)］。91年5月には，フジモリが議会と全く事前に協議せず，突然，アメリカ合衆国と麻薬対策協力協定を締結したことに，政党勢力が強く反発した*20。

だが1991年前半までは，一時的な争点連合を政党勢力の一部と組むことができたため，フジモリと政党勢力が決定的に対立するまでには至らなかった。一時的な争点連合はフジモリが有力政党の関心をつくことで成立した。最大野党の PAP は，95年選挙で政権へ返り咲くことを念頭に，不正蓄財容疑で同党出身のガルシア元大統領に対する議会の非難決議の成立を阻止することに最大の関心を抱いたことから，これをてこにいくつかの争点での支持を取り付けることができた。他方，右派政党は経済政策に関しフジモリと一致する点があり，また左派系政党への対抗意識もあった［Bインタビュー］。与党は90年9月から11月に，PAP の支持で中央銀行総裁の指名や補正予算の承認，与党の下院議長に対する不信任決議案の否決，ガルシア前大統領に対する非難決議案の否決などを，また，右派系政党と組んで労働大臣に対する不信任決議案の否決や銀行国有化法の廃止などを行った。

1991年に入ると，経済政策の違いに加え，PAP 前政権の汚職追及を求める世論の高まりを無視し続けることはできないとの意見が与党内に広まったことから，PAP と与党の関係は次第に疎遠となった。そして，不正蓄財容疑で同年8月に PAP 前政権の

＊20　フジモリが緊急大統領令を使って予算の赤字項目を停止したこと，および議会との事前協議なしにアメリカ合衆国と麻薬対策協定を締結したことは，後に政党勢力が「大統領立法行為統制法」を制定する伏線となった。なお，麻薬対策協定の締結は，国際金融社会へ復帰するための支援を与える条件としてアメリカ合衆国が提示していた。また，1991年4月の農民自警団への武器供与開始や同年5月のテロ組織に支配された大学施設への軍の派遣の決定など，テロ対策の点でもフジモリは野党と事前に協議しなかった。

閣僚5名に，また10月にはガルシア前大統領に対する非難決議が与党の賛成で成立すると，PAP は与党との関係を一切絶った［Bインタビュー］*21。他方，右派系政党と与党は共同し，前記の非難決議の他，91年5月に雇用促進，民間投資促進，テロ対策の3分野に関する政府への委任立法権の付与を承認した。

ただ一時的な争点連合といっても，前記の例が示すように，内容的にはペルーの深刻な問題に取り組むものではなかった点に注意すべきである。フジモリは，そうした問題に関し政党勢力には立法能力がないと判断し，政府に委任立法権が付与されることを期待したのだった［Torres y Torres 1992：149-150］。そして，一時的な争点連合も，1991年後半に入ると前記のガルシア前大統領に対する非難決議以外は機能しなくなる。同年11月下旬には，前章で見たフジモリと政党勢力との対立の中で，政府が要求した税制に関する委任立法権の付与が議会で拒否された*22。

一時的な争点連合の可能性が次第になくなる中，政党勢力による大統領罷免への動きがフジモリを刺激し，両者の緊張関係を決定的な対立へと次第に追いやった。その契機となったのは1991年8月に起きたエクアドル軍のペルー領侵入事件である。この事件は戦闘態勢に入り対峙していた両国軍の兵力引き離しにより克服されるが，その処理をめぐる政治責任を理由に，一部の野党議員が大統領を罷免すべきとの提案を行った。この時点で大統領罷免という提案自体は他の議員の賛同を得て議会の多数意見となることはなかったが，フジモリの政党勢力への不信を一層強める効果を持った［Torres y Torres 1992：80-86］。

注目すべきは，1991年3月にはフジモリ罷免の可能性を一部の議員が検討しているという報道だったものが，エクアドルとの事件を機に議員による具体的な提案となったことである。フジモリを「道徳的に不適格」と批判した91年12月の上院動議は，同年11月以降に顕在化するフジモリと政党勢力の対立の中で突然出てきたのではない。91年を通じ政党勢力の間で次第にフジモリ罷免への動きが強まったと見るべきである。

フジモリ罷免の動きが見え隠れする中，政党勢力は大統領の立法権限を制限する動きに出る。「大統領立法行為統制法」の法案が下院の委員会レベルで可決されたのは1991年10月30日，つまり，テロ対策に関する多くの委任立法令が廃止，修正され，フジモリと政党勢力の対立が深刻化する11月下旬の約1カ月前である。そして，既に見た政党勢力との激しい対立を経て，91年12月にフジモリは憲法停止措置の実施を決意したと考えられる。

この頃に非常措置の実施が決定されたと考えるのは，いくつかの証言に基づくものである。まず，憲法停止措置の計画を「数カ月前から（hace algunos meses）」練っ

---

*21　非難決議を受けガルシアは最高裁判所に提訴されたが，ここの裁判官の半数以上が PAP 系だったことからガルシアが影響力を行使し，告訴を握りつぶさせた。

*22　Kenny［1996：93-94］では，政党勢力の行動に注目し，1991年前半までが政党勢力が一致してフジモリに反対する具体的な行動をとるまでには至らなかった時期で，91年11月のテロ対策に関する委任立法令の廃止，修正からは，政党勢力による一致した行動を前に争点連合の可能性はなくなり，フジモリが非常措置の選択肢を優先させる段階としている。

ていたと，同措置の実施1年後にフジモリが回顧している［Fujimori 1993：6］。この場合の「数カ月」とは2～3カ月を意味するので，早ければ1992年1月には憲法停止措置の実施作戦を本格的に練り始めたことになる。よってその決定はその少し前の91年12月になされたと考えられる。二つ目の証言は，筆者がフジモリに近い筋から得たもので，これによれば，「大統領立法行為統制法」と財政赤字を強いた92年度予算を契機として，91年12月に憲法停止措置の実施が決定されたという［Cインタビュー］。

もう一つは，憲法停止措置から6年後に出されたフジモリによる回想録である。ここでフジモリは，政党勢力がテロ対策の委任立法令を廃案にし代替案を示さなかったこと，および大統領罷免の動きすら見られたことの二点に触れた後で，「強硬手段が頭に浮かんだのは91年11月のことだった」と述べている［フジモリ 1999］。上院でテロ対策関連の委任立法令が廃案，修正されるのは正確には1991年11月25日および26日であったことからすれば，憲法停止措置の実施は91年12月中に決定されたと言えよう。

憲法停止措置を決定した時期というのは，フジモリの政治スタイルの一側面を考える上で重要である。つまり，フジモリは具体的な中長期的見通しや計画の下に政治を行うのか，あるいはむしろ状況に適した対応をその都度考えてとるのか，という問題である。仮に従来の支配的な見方のように就任直後から憲法停止措置を考えていたとすれば，前者を仮定することになる。だが，1990年の選挙運動におけるフジモリの行動や大統領就任後の経済政策やテロ対策などを検討すると，フジモリは何らかの具体的な中長期的計画や見通しに基づいて政治を行ってはこなかった*23。憲法停止措置に関しても，これまで見たように，政党勢力との対立が極限に至る状況にフジモリが対応したと考えるのが妥当であろう。

最後に，従来の支配説が重視する1992年3月の首相と右派系政党の合意はフジモリにとって無意味だった点を指摘しておく。それはまず，この合意が，フジモリと政党勢力の激しい対立状況を覆すにはかなり遅い時期に達成されたからである*24。前述のように，フジモリは既に91年の12月中には政党勢力との関係については見切りをつけていた。また，首相と右派系政党の合意には，経済政策や「大統領立法行為統制法」の扱いが含まれていなかったことも忘れてはならない。つまり，右派系政党も賛成した赤字予算には変更がなく，また，大統領権限の点でフジモリは手足を縛られたままだったのである*25。

＊23　こうした点について詳しくは Jochamowitz［1993］，村上［1994a：30-31］を，1990年選挙については＊5の文献を参照。状況に対応するフジモリのリーダーシップからすれば，フジモリは権威主義的な制度の構築に失敗した［Levitsky 1999：84］というよりも，フジモリは元来，何かを制度化するという発想自体を持ちあわせていないというべきであろう。

＊24　この合意が遅かった点は Degregori y Rivera［1993：17］も指摘している。ケニーは首相と右派政党との交渉が憲法停止措置を悟られないための陽動作戦だった可能性に言及している［Kenny 1996：97-98］。

＊25　ケニーは結論で，フジモリが赤字予算項目を緊急大統領令で停止したこと，および政党勢力が「大統領立法行為統制法」を成立させたことに触れ，両者とも1980年代のペルー政治で作られたルールの枠を超えるものだったと分析している［Kenny 1996：99-100］。

III．政党についての評価

1．1980年代までの政党をめぐる問題

政党勢力の行動にも着目して憲法停止措置に至る過程を分析すると，政党勢力の側にも，短期的利害関心に基づく党派的な行動や合意形成への消極性といった問題があったことが理解される。ここで想起すべきは，憲法停止措置の原因をフジモリの権威主義的な政治に求める研究者が，前述のような政党の問題を1980年代までのペルー政治の歴史的，構造的な問題として論じてきたという点である*26。

通常，19世紀初頭にスペインから独立してからのペルーの政治は，植民地時代の階層秩序に由来するパトロン・クライアント関係（以下，PC 関係と略）に基づく権力闘争と捉えられる。ここでいう PC 関係とは，政治的有力者が財，便宜，恩恵などの価値を恩情により提供し，それを受けて様々な社会階層の個人や集団がその有力者に忠誠や支持などの政治的資源を提供し，服従する関係である。ペルーでの PC 関係は，意思決定過程に参加する者が少数に限られる権威主義的な性格を有す。上下関係による価値交換の契機に注目すると家産的（patrimonial）でもある［Cotler　1968；1978］。

PC 関係から形成された派閥や政党などペルーの政治団体は，相互不信と排他的な姿勢により，対立するだけで，妥協や交渉を通じ中長期的な合意や共通の目標を形成する政治行動を定型化，制度化してこなかった。それは，政治団体の長たる最高指導者への絶対的な忠誠と服従の内部関係が形成されたこと，および従者の利益を排他的に代弁し彼らに優先的に利益を与える必要性から，各政治団体が他の団体と競合関係にあると認識しその主張や立場を絶対視したためである［Cotler　1978；1988：153-162；1992：150-151］*27。

こうした伝統的な政治行動のパターンは

＊26　政党の問題の研究には，短期的な視点から1980年代に政党が直面した状況や問題に重きを置く分析と，長期的な観点から政党が歴史的に抱えてきた構造的な問題を重視する立場の二つが存在する。前者の立場の研究には，政党をアクターとして捉えその能力や行動の限界と問題点を指摘する分析と，大統領制，政党システム，選挙制度などが政党に与えた負の影響を強調する分析がある［Tanaka　1998：24-28］。1980年代における政党の問題点を中心にした研究には Adrianzén［1992b；1993］，Bernales［1993；1995］，Cameron［1994；1997］，Crabtree［1994］，Dietz［1998］，Dietz y Dugan［1996］，Grompone［1991；1996；1999］，Grompone y Mejía［1995］，Guerra［1996］，López［1991；1992；1993a；1994b；1994c］，Lynch［1996a；1996b；1999；2000］，Mauceri［1995；1996］，McClintock［1993；1996］，Pásara［1988；1994］，Pease［1999］，Planas［2000］，Revesz［1996］，Roberts［1998］，Rospigliosi［1994］，Sagasti and Hernández［1994］，Stokes［1995］，Tanaka［1998］，Tudela［1993］などがある。大統領制や政党システムなどが政党に及ぼした影響の研究には McClintock［1994］，Tuesta［1995］など，また歴史的，構造的視点からの政党研究には Cotler［1988；1992］，Mauceri［1997］，遅野井［1993a；1993c］などがある。以上の研究者のほとんどは，憲法停止措置の原因をフジモリの権威主義的な政治に求めている（＊3参照）。なお，Tanaka［1998］は後述のコトレルなどの議論を批判し，主に政党の代表機能に着目し80年代に政党は機能していたが，同年代末に政治の中心領域が社会運動から世論の次元に移った状況に政党が適応できず弱体化したと論ずる［Tanaka　1998：21-200］。しかし，コトレルなどタナカが批判している研究者は，代表機能の他に，政策提起，合意形成，市民に対する政治教育，国民の努力を一定の方向に結集する統合などの機能が果たせなかったことも同時に指摘しているのであり，タナカの批判は的を射ていないと思われる。

＊27　ただし，この一般的な行動パターンは，短期的利害の一致から政治団体の長である有力者の間だけで内密に話し合いが進められ，その限りでの合意に達することを排除するものではない［Colter 1988：158-162, 190］。

1980年代の民主的な政治の枠組みの中でも存続し，政党政治を蝕んだと分析される。80年代の政治を担った4政党では，いずれもカリスマ的リーダー（PAP を除き全員が党の創設者）がパトロンとして党内に君臨し，自己利益の追求が最優先された。各党は，相互に排他的，非妥協的な姿勢を貫き，民主的な政治空間を形成することもなく政党派閥の政争に没頭する一方，80年代の深刻な諸問題に対応する政策立案能力を持たなかった。最初は政党に投票していたペルーの有権者も，次第に先鋭化した経済・社会問題を前に政党への信頼を失い，政党と無関係な独立系の政治家に危機的状況の打開への期待を寄せるようになったのである［Cotler 1994：176－200；McClintock 1989：128-132；1993：113；1996：56-60］*28。

同時に，1980年代の政党は，大統領個人の存在と権限が拡大したことによっても弱体化が進んだと指摘される。一般民衆は大統領を困難な諸問題を処理する救世主(messiah)，いわばペルー全体のパトロンとして注目し期待した*29。また，前の1933年憲法と比較すると，79年憲法では議会に対する大統領権限が強化され，議会が閣僚に対し不信任決議を成立させる要件が出席議員の相対多数から下院議員定数の絶対多数へ引き上げられるなど厳しくなった他，大統領に緊急大統領令と委任立法令の公布権限が新たに認められた。大統領の役割が大きくなった分，政党とこれが構成する議会が次第に存在感を失ったのであった［McClintock 1994：289-293, 304-309］*30。

以上のように分析されていた政党が，フジモリの当選から憲法停止措置までの過程では議会で多数を占める野党勢力となった。だが，この過程をめぐるこれまでの支配的な解釈は，1990年代に入って政党の性格や行動様式が変わったのか否かを全く検証せずに，憲法停止措置をフジモリの一方的な行為や姿勢の帰結と捉えてきたのである。

---

*28 Bourricaud［1989：11］でも同様の指摘がある。1980年代の経済のインフォーマル化（例えば，89年に首都リマで，常勤の職について最低賃金以上を得る条件を満たしていない不完全就業の割合が80パーセントを超えたこと）が政党に及ぼした影響を重視するキャメロンの研究がある。これによれば，経済のインフォーマル化によって労働者といった明確なアイデンティティが失われ，集団的な政治行動よりも日常的な生活を最低限維持するための個人レベルで行う生き残り活動を優先させる傾向が広まり，諸問題に対処できない政党に対する忠誠や志向を持たない浮動的な有権者が増加し，彼らが政党と無関係な無所属・独立系の候補を支持した［Cameron 1994：18-143；1997：37-50］。浮動的な有権者の増加は，経済のインフォーマル化によって加速された面はあろうが，根本には，直面する問題を克服するという結果やこれへの期待度により政治的な支持を決定ないし変更するという伝統的な正統性意識が存在していた可能性がある［Morse 1982；村上 1999：163-165；Murakami 2000］。

*29 ペルーにおけるこうした志向の背景には，手続よりも結果を重視する伝統的な正統性意識が存在すると考えられる［Morse 1982；村上 1999：163-165；Murakami 2000］。ペルー人の政治意識や姿勢については，Crabtree［1997；1998］，Durand［1996］，Grompone y Mejía［1995］，Panfichi［1995］，Panfichi y Francis［1993］，Panfichi y Sanborn［1996］，Parodi ed.［1993］，Rochabrūn［1994］，Sānchez［1996］，Stokes［1996b；1997］，なども考察しているが，筆者による整理は，村上［1999］，Murakami［2000］を参照。

*30 Tuesta［1995：61-84］は，大統領制や政党の連合パターンなどを含む政党システムに加え，選挙制度も政党政治に負の影響を与えたとする。ただ，こうした要因が現実の政治にどう作用したかを具体的に分析していない［Tanaka 1996：186-187］。また，選挙制度は1980年から92年まで同じだったが，80年代の選挙結果（強い政党勢力）と90年の選挙結果（政党の衰退）が異なったことからすれば，選挙制度自体が政党の衰退に決定的な要因だったかは疑問である。

2．憲法停止措置後の政治過程における政党勢力の過大評価

憲法停止措置の原因をフジモリの権威主義的な政治に求める論者には，憲法停止措置後のペルー政治に関し，政党勢力の状況を十分に分析しないまま今度はその力を過大評価する傾向が見られる。

例えば，憲法停止措置という異常事態を収拾するため，フジモリが制憲議会の設置を決定した原因についてである。当初フジモリは，異常事態を収拾する道として，政府が任命する専門家委員会が起草した新憲法案を国民投票に付し，その後に新議会の選挙を実施すると発表した。だが国際社会は，非民主的としてこのフジモリ案を批判し，政党を含む国内の政治諸勢力が参加できるプロセスの設置を求めた。国際社会の要求を受け，フジモリは制憲議会の設置を最終的に表明する*31。

こうした経緯に関し，憲法停止措置の原因をフジモリの一方的行為に求める論者は，国際社会とともに政党勢力の果たした役割も強調する。具体的には，政党勢力が最初のフジモリ案に反対し制憲選挙の実施を要求したことを想起し，フジモリが制憲議会の設置を発表する3日前の5月15日，政党勢力がリマで反フジモリの大集会を成功させ圧力をかけたと分析する［McClintock 1996：69-70］。

しかしこの見解には三つの問題があると考える。まず，政党勢力がフジモリの憲法違反を批判していたことが十分に認識されていない。政党勢力は1979年憲法の擁護を主張するのが筋だったはずだが，フジモリの非民主性を示すため制憲議会の設置を提案し憲法改正の必要性を認める結果となった。政党勢力は依って立つべき基盤を自ら崩してしまったと見るべきである。

第二に，5月15日の集会は多く見積もっても約1万5000人が集まった程度で［*Resumen semanal* No. 670］，前月にフジモリ側が召集した憲法停止措置支持集会とほぼ同程度の動員だった。しかも，この後もフジモリに対する国民の高い支持率が続くなど，この集会はその後の政治動向に何の影響も与えなかったことからすれば，「成功した集会」という評価は行き過ぎである。

第三に，フジモリが制憲議会の設置を決定したのは，あくまでも国際的な圧力による点である。フジモリは政党勢力が提案した制憲議会の開設は拒否した。ところが4月下旬から5月上旬にかけ米州機構の使節団やアメリカ合衆国のラテン・アメリカ担当国務次官補がペルーを訪れ，事態収拾に向け民主的なプロセスが約束されない限りペルーは経済制裁を受ける可能性を示唆した。国際社会の厳しい反応を直接聞いたフジモリは，当初の収拾策を変更する決定を下したのである。フジモリは当時，国内では圧倒的な支持と理解を得たが，国際的には彼自身が予想した以上に強い批判を受けたと認識していた*32。

政党勢力を過大評価した別の例としては，1995年の大統領選挙に向けた動きにおける政党勢力の位置付けをめぐる議論がある。この中では，まず，制憲議会が設置され憲

＊31　制憲議会選挙は1992年11月に実施され，翌12月に制憲議会が開設された。

法停止措置後の異常事態が収拾された後，軍の影響力が強まるなどフジモリ政権が権威主義的な性格をさらに強めていることが指摘される。そして，93年に国民投票を経て発効した新憲法で大統領の連続再選が1回に限り認められたことを受け，再選への意欲を見せるフジモリに対し，政党勢力はそれまで排除されてきた社会集団の制度的な参加を目指し，民主的な政治の実現に向け努力していると分析される［Cotler 1994：213-221, 223-224］。

この分析で問題となるのは，政党と社会集団の関係，政党間の関係，政党の刷新など，政党の内情や行動，態度に関する具体的な検証が行われずに，政党が民主政治の定着に向けて努力していると判断している点である。実際，前記のように政党勢力を評価した研究者自身が，それほど時間を置かずして*33，政党の限界を指摘しつつ，その判断が「時期尚早の期待（un deseo prematuro）」だったことを告白せざるを得なかった。「時期尚早の期待」を寄せた原因は，政党の指導者がそれまでの経験から教訓を学んだと信じていたことにあったという。そして，各政党は，根本的な内部改革を行い新たな綱領や社会との民主的な関係を作ることが未だできない限界を持ち，内部選挙により候補者を選ぶことで民主的なイメージを打ち出そうとした政党もあったものの，派閥対立が内部選挙の実施前に表面化し国民の信頼を回復するのには不十分だったことを指摘した［Cotler 1994：225-226］。

しかし既に見たように，1980年代の政党が深刻な問題を抱えていたことについては研究者が一致して指摘していたことである。これを前提に憲法停止措置に至る過程の政党について少しでも具体的な検証を行っていれば，既に述べたような政党勢力の限界が認識され，時期尚早の期待を抱くことはなかったであろう。このような視点から筆者が同時期に行った政党に関する分析は，政党勢力について悲観的な結論に達していた［村上 1994b］。

＊32　同様に，政党勢力が反対したため，フジモリは制憲議会選挙とともに死刑の復活に関する国民投票を実施する意向を最終的に断念したとの分析［McClintock 1996：71］も過大評価である。実際には，アメリカ合衆国がフジモリの提案したあらゆる国民投票の実施に反対していたことが根本的な理由である。憲法停止措置後の動向や状況は村上［1995a；1995b］，Murakami［1995：47-50］によるが，Balbi［1992；1996］，Blacker［1993］，Boloña［1993］，Carrión［1996；1999］，Conaghan［1995；1996］，Graham and Kane［1998］，Kay［1996］，遅野井［1995］なども参照。

＊33　Cotler［1994：221-228］は，政党による民主化の努力を評価した結論を記した3カ月後，これが「時期尚早の期待」だったことを認める後記を付した。しかし，後記でも，憲法停止措置までの過程については，再検討が加えられることはなかった。なお，本稿のレフリーからのコメントで，新憲法案に関する1993年10月の国民投票における政党の位置付けの問題が触れられていないとの指摘を受けた。この国民投票では，賛成（フジモリ側）52パーセント，反対（政党勢力側）48パーセントという僅差の結果となった。僅差になった主な理由は，(a) フジモリが60パーセントを超える大統領支持率から，容易に支持を得られるだろうと考え，きめの細かい賛成運動を行わなかったこと，(b) 政党勢力が，新憲法案で簡略化され憲法による保証が後退した経済，労働，社会保障，教育，テロ犯への死刑適用など，有権者の経済・社会生活や安全に関わる具体的な争点を取り上げ，誇張を含む反対運動を早くから実施し動員に成功したこと，の二つにあると筆者は考えている［村上 1994a：38-39；1995a：18-20］。93年の国民投票に関するこうした分析は，Cotler［1994：215-217］など，フジモリの一方的な行為を重視する研究者にも共有されている。問題は，政党勢力が93年の国民投票で見せた一時的な動員を契機に，自身の革新を行い社会との関係を緊密にしようとしたか否かである。この点については，本文で述べているように，フジモリの権威主義性を重視する研究者の見方に限界があったと言える。

1995年大統領選挙へ向けての政党勢力の限界を補足すれば，各党が行った内部選挙は，投票権を持つ党員数とその分布，各候補の得票結果などの基本的データに加え選挙過程の様子も外部には全く伝わらず，透明で公正な過程ではなかった。しかも内部選挙は，派閥対立で勝った勢力によって，自身の正当化のために実施された面が強かった。

また，政党の内部刷新という点に関しては，フジモリの政治的操作によって政党が悪であると多くの国民が信じ込まされていると政党勢力が認識していた点が隘路となった。政党勢力に言わせると，フジモリが国民を騙しているのであり，自省すべき点はなかったのである*34。この状況では自己改革が進むことを期待することは到底できなかったであろう。ちなみに，現在に至るまで，各党は部外者にも理解されるような刷新を行っていない。

結び

これまで，憲法停止措置までの過程に主たる焦点を当て，ペルーの政治過程の展開を決定付けた要因としてフジモリというアクターを重視する従来の支配的な見方を批判的に検討してきた。本稿はもう一つのアクターである政党勢力の姿勢や行動も分析の対象にすべきであるとの立場から，政党勢力の姿勢や行動，フジモリの政党不信，政党勢力とフジモリの関係の質的変化といった点にも注目する必要性を指摘した。また，政府と政党のテロ対策をめぐる対話の貧弱な成果，政党勢力によるフジモリ罷免の動きの顕在化，フジモリが憲法停止措置を決定した時期など，1991年の出来事の重要性を述べた。憲法停止措置はフジモリ政権発足時から不可避ではなかったが，フジモリ，政党勢力ともに各々の行動や姿勢を変えることなく本格的な対立へと至り，政治が行き詰まる中で憲法停止措置が起きたのであった。

ペルー政治の主要アクターをフジモリと反フジモリ勢力に分け，後者の実情を十分に分析せずにこれを評価し，民主政治を推進する勢力と捉える分析のパターンは最近の研究にも見られる。例えば，憲法停止措置以降の政党の衰退を分析したある研究は，フジモリと政党勢力が各々持つ短期的な政治目的や思惑，意図については検討しているが，政党の性格や行動については全く分析しないまま，政党の「刷新がかなり進んでいる」と指摘している［Tanaka 1999: 25］。

また別の研究は，現在のペルーでは民主主義と見なされるための「手続き的最低要件」（自由選挙，普通選挙権，基本的な市民的自由の保護，軍に対する文民支配の四つ）のいくつかが満たされず，三権分立も崩れていることなどを指摘する中で，フジモリに反対する勢力を「民主的反対派」(democratic opposition) と表現している［Levitsky 1999: 83, 90］。この研究は反フジモリ勢力が「手続き的最低要件」の実現や三権分立の確立を主張していることからこう表現しているのだが，本当に反フジモ

＊34　*Cuestión de estado* No. 7/8-9や *Socialismo y participación* No. 73に掲載されている各政党の指導者のインタビューや論文，ならびに Lynch［1996b］を参照。

リ勢力が「民主的」なのだろうか。

1980年代のペルー政治の主役だった政党が持っていた権威主義的な特徴や行動様式は，政党勢力を含む現在の反フジモリ勢力を構成するすべてのグループに当てはまるのが実情である［村上 1997a］。前出の研究自身，「民主的反対派」がペルー社会の幅広い階層を代表する民主的制度の構築に成功しておらず，憲法停止措置から「7年以上経つがペルーには真の民主主義運動（real democracy movement）は存在しない」と述べている［Levitsky 1999：90］。これでは反フジモリ勢力を「民主的」と形容する意味がないであろう。

フジモリの態度や行動のみに民主政治の不安定化要因を求める分析では，フジモリの去就に大きな関心が払われ，政治的アクターの間に民主的な制度（成文化されているか否かを問わず政治的アクター間に存在するルールや合意）をどう作り上げるかという根本的な問題が忘れられてしまう*35。同時に，フジモリ後のペルー政治が，せいぜい1970年代後半に行われた民政移管後の状況の繰り返しに終わる可能性が十分にあることに対しても十分な注意が払われないことになる。この民政移管の過程では，軍事政権を終結させることに最大の関心が払われ（これが「民主化」と呼ばれた），民政移管を担った政党がどの程度まで民主的だったかについては当時，関心が向けられなかった。古い体質のままの政党が80年代にどのような政治をしたのか，その結果は既に出ているのである*36。

憲法停止措置に至る政治過程では，フジモリと政党勢力が各々自ら正統と考える主張や合理的と判断する目的に固執して次第に政治が分極化し，政治的アクターの間で合意やルールが醸成される可能性が消えていった。それは1980年代までのペルー政治で歴史的に見られた政治行動パターンの繰り返しだったと言える。こうしたパターンは現在に至るまでペルー政治で見られ，民主政治の定着を阻害している。

1990年代のペルーの政治過程を研究する際には，フジモリや反フジモリ派の政治家・政治グループの各々の態度や性格の分析にとどまらず，これらのアクター間で見られる関係を分析し，その構造的な問題を十分に考察する必要がある。そうすることにより，中長期的に民主政治を定着させる条件や方法を考えることが可能となろう。ここで重要なのは，歴史的な対立や分極化のパターンの分析を踏まえ，対立や分極化を抑える政治制度を構築する方法や条件を

＊35　憲法停止措置に至る過程でフジモリ政治の権威主義的性格を重視した論者ではこの傾向が一般的である。例えば，López［1994a；1995b］，McClintock［1999］，など。この立場をとった論者で将来における民主主義の定着の観点から政党を含む反フジモリ勢力の限界を検討した最初の例は恐らく Adrianzén［1997］で，その後の例はようやく2000年の選挙戦が始まってから見られる［Adrianzén 2000；López 2000］。

＊36　Levitsky［1999：90］も同じ可能性を懸念しているが，そうであればフジモリと反フジモリ勢力を比較し後者が「より民主主義志向である（more democratically minded）」［Levitsky 1999：85］と単純に分類するのはあまり意味がないように思われる。取り組まれるべき課題は，ペルーの民主主義を1980年代よりももっと定着させるための条件と道筋を具体的に考察することである。70年代後半の民政移管については，特に Cotler［1988；1993；1994］，Lynch［1992a；1999］，Mauceri［1997］を参照。

＊37　筆者によるメキシコとペルーを比較した試論として村上［1997b］参照。

具体的に探ることである。

また，アクター間に存在する制度やその制度化の度合を研究することで，制度化のレベルが低い，ないしは制度が解体してきたとも言えるペルーとラテン・アメリカの他の国や他地域と比較を行うこともできよう[*37]。この比較を行うためには，制度（化）を計る指標（内容と基準）を明確に設定する必要があるが，これについては稿を改めてより詳細に検討しなければならない。

参考文献

Abad Yupanqui, Samuel B., y Carolina Garcés Peralta

1993 El gobierno de Fujimori : antes y después del golpe. En Comisión Andina de Juristas, ed. *Del golpe de estado a la nueva constitución*. Serie Lecturas sobre Temas Constitucionales 9, Lima : Comisión Andina de Juristas, pp. 85-190.

Abugattás Abugattás, Juan, Rolando Ames Cobián y Sinesio López Jiménez

1992 *Desde el límite : Perú, reflexiones en el umbral de una nueva época*. Lima : IDS, Instituto Democracia y Socialismo.

Adrianzén Merino, Alberto Luis

1992a ¿Nuevo modelo asiático y vieja república aristocrática ? *Quehacer* No. 76 : 11-13.

1992b Democracia y partidos en el Perú, *Pretextos* Nos. 3-4 : 7-19.

1993 Partidos y orden social en el Perú. En Alberto Adrianzén, Jean Michel Blanquer, Ricardo Calla, *et al. Democracia, etnicidad y violencia política en los países andinos*. América Problema 16, Lima : IFEA, Instituto Francés de Estudios Andinos e IEP, Instituto de Estudios Peruanos, pp. 29-41.

1997 La oposición y la democracia, *Cuestión de estado* No. 27 : 11-14.

2000 Elecciones y autoritarismo, *Cuestión de estado* No. 26 : 10-13.

Alva Orlandini, Javier

1993 *El círculo vicioso*. Lima : Editora Zeus.

Ames Cobián, Rolando

1992 La crisis política y los problemas y posibilidades del Perú, *Cuestión de estado* separata especial : 21-29.

Arias Quincot, César

1994 *La modernización autoritaria : la nueva institucionalidad surgida a partir de 1990*. Lima : Fundación Friedrich Ebert.

Balbi, Carmen Rosa

1992 Del golpe del 5 de abril al CCD : los problemas de la transición a la democracia, *Pretextos* Nos. 3-4 : 41-61.

1996 El fujimorismo : delegación vigilada y ciudadanía, *Pretextos* No. 9 : 187-223.

Béjar, Héctor

1992 Dictadura y democracia, *Socialismo y participación* No. 58 : 7-15.

Bernales Ballesteros, Enrique

1993 Crisis y partidos políticos. En Comisión Andina de Juristas, ed. *Del golpe de estado a la nueva constitución*. Serie Lecturas sobre Temas Constitucionales 9, Lima : Comisión Andina de Juristas, pp. 11-83.

1995 La crisis de los partidos políticos. En Carlos Fernández Fontenoy, coord. *Sociedad, partidos y estado en el Perú : estudios sobre la crisis y el cambio*. Lima : Universidad de Lima, pp. 127-190.

Blacker Miller, Agusto

1993 *La propuesta inconclusa*. Lima : La Moneda.

Boloña Behr, Carlos

1993 *Cambio de rumbo : el programa económico para los noventa.* Lima : Instituto de Economía de Libre Mercado, San Ignacio de Loyola.

Bourricaud, François

1989 *Poder y sociedad en el Perú.* Ideología y política 6, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos e IFEA, Instituto de Francés de Estudios Andinos.

Bowen, Sally

2000 *El expediente Fujimori : el Perú y su presidente 1990-2000.* Lima : Perú Monitor S. A.

Busse, Erika

1992 ¿ Presidente o gobierno ? : la legitimidad de las instituciones y actuaciones según las encuestas de opinión (agosto 1990-diciembre 1991), *Debate en sociología* No. 17 : 313-333.

Cameron, Maxwell A.

1994 *Democracy and Authoritarianism in Peru : Political Coalitions and social Change.* New York : St. Martin's Press.

1997 Political and Economic Origins of Regime Change in Peru : The *Eighteenth Brumaire* of Alberto Fujimori. In Maxwell A. Cameron and Philip Mauceri, eds. *The Peruvian Labyrinth : Polity, Society, Economy.* Pennsylvania : The Pennsylvania State University Press, pp. 37-69.

1998 Self-Coups : Peru, Guatemala and Russia, *Journal of Democracy* 9(1) : 125-139.

Carrión, Julio

1996 La opinión pública bajo el primer gobierno de Fujimori : ¿de identidades a intereses ? En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996.* Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 277-302.

1999 La popularidad de Fujimori en tiempos ordinarios, 1993-1997. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *El juego política : Fujimori, la oposición y las reglas.* Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 231-246.

Centro Norte Sur/Universidad de Miami, Centro Peruano de Estudios Sociales e Instituto de Estudios Peruanos

1992 *Perú 1992 : la democracia en cuestión.* Lima : Centro Norte Sur/Universidad de Miami, Centro Peruano de Estudios Sociales, e IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Conaghan, Catherine M.

1995 Polls, Political Discourse and the Public Sphere : The Spin on Peru's Fuji-golpe. In Peter H. Smith, ed. *Latin America in Comparative Perspective : New Approaches to Methods and Analysis.* Boulder, Colo. : Westview Press, pp. 227-255.

1996 Vida pública en los tiempos de Alberto Fujimori. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996.* Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 303-329.

Cotler Dolberg, Julio

1968 La mecánica de la dominación interna y del cambio social en la sociedad rural. En José Matos Mar, Augusto Salazar Bondy, Alberto Escobar, *et al. Perú problema : cinco ensayos.* Perú Problema 1, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos, pp. 165-213.

1978 *Clases, estado y nación en el Perú.* Perú Problema 17, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

1988 Los partidos políticos y la democracia en el Perú. En Luis Pásara y Jorge Parodi, eds. *Democracia, sociedad y gobierno en el Perú.* Lima : Centro de Estudios de Democracia y Sociedad, pp. 151-191.

1992 Democracia y desintegración política en Perú. En René Antonio Mayorga, coord. *Democracia y gobernabilidad en América Latina.* Caracas : Centro Boliviano de Estudios Multidisciplinarios, Instituto Latinoamericano de Investigaciones Sociales y Editorial Nueva Sociedad, pp. 149-164.

1993 *Descomposición política y autoritarismo en el Perú.* Documento de trabajo No. 51,

Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.
1994 *Política y sociedad en el Perú : cambios y continuidades*. Perú Problema 23, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.
1999 *Drogas y política en el Perú : la conexión norteamericana*. Perú Problema 26, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Crabtree, John
1994 La crisis del sistema partidario peruano (1895-1995), *Apuntes* No. 35 : 19-36.
1997 Populismo y neopopulismo : la experiencia peruana, *Apuntes* No. 40 : 97-109.
1998 Neo-populism and the Fujimori Phenomenon. In John Crabtree and Jim Thomas eds., *Fujimori's Peru : The Political Economy*. London : Institute of Latin American Studies, University of London, pp. 7-23.

Daeschner, Jeff
1993 *La guerra del fin de la democracia : Mario Vargas Llosa versus Alberto Fujimori*. Lima : Peru Reporting.

Degregori Caso, Carlos Iván, y Romeo Grompone
1991 *Elecciones 1990, demonios y redentores en el nuevo Perú : una tragedia en dos vueltas*. Colección Mínima 22, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Degregori Caso, Carlos Iván, y Carlos Rivera
1993 *Perú 1980-1993 : fuerzas armadas, subversión y democracia : redefinición del papel militar en un contexto de violencia subversiva y colapso del régimen democrático*. Documento de trabajo No. 53, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Delgado Guembes, César
1992 *¿Qué parlamento queremos ?* Lima : Cultural Cuzco.

Dietz, Henry A.
1998 *Urban Poverty, Political Participation, and the State : Lima 1970-1990*. Pittsburgh : University of Pittsburgh Press.

Dietz, Henry A., y William E. Dugan
1996 Clases sociales urbanas y comportamiento electoral en Lima : un análisis de datos agregados. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 251-274.

Durand, Francisco
1996 El fenómeno Fujimori y la crisis de los partidos, *Revista mexicana de sociología* 58(1) : 97-120.

El Directorio de Editora Perú, S. A. ed.
1991 *Decretos legislativos 91*. Lima : Editora Perú, S. A.

Ferrero Costa, Eduardo
1993 Peru's Presidential Coup, *Journal of Democracy* 4(1) : 28-40.

Ferrero Costa, Eduardo, ed.
1992 *Proceso de retorno a la institucionalidad democrática en el Perú*. Lima : CEPEI, Centro Peruano de Estudios Internacionales.

フジモリ，アルベルト
1999 「私の履歴書　アルベルト・フジモリ　15　議会閉鎖」『日本経済新聞』（6月16日）。

Fujimori Fujimori, Alberto Kenya
1993 Mensaje a la nación (5 de abril de 1993), Escarte especial de *El peruano* (6 de abril).

González Manrique, Luis Esteban
1993 *La encrucijada peruana : de Alan García a Fujimori*. 2 tomos, Madrid : Fundación Centro Español de Estudios de América Latina.

Graham, Carol, and Cheikh Kane
1998 Opportunistic Government or Sustaining Reform ? : Electoral Trends and Public-Expendicute Patterns in Peru, 1990-1995, *Latin American Research Review* 33(1) : 67-104.

Grompone, Romeo
1991 *El velero en el viento : política y sociedad en Lima*. Urbanización, Migraciones y

Cambios en la Sociedad Peruana 12, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.
1996 Representación política, partidos y escenarios futuros, *Socialismo y participación* No. 73 : 11-18.
1999 *Las nuevas reglas de juego : transformaciones sociales, culturales y políticas en Lima.* Urbanización, migraciones y cambios en la sociedad peruana 13, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Grompone, Romeo, y Carlos Mejía
1995 *Nuevos tiempos, nueva política : el fin de un ciclo partidario*. Colección Mínima 32, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Guerra García, Francisco
1996 *Reforma del estado y crisis de los partidos*. Lima : CEDEP, Centro de Estudios para el Desarrollo y la Participación.

出岡直也
1993 「政治」染田秀藤編『ラテンアメリカ――自立への道』世界思想社，163-206。

Jaime Barreto, Wilson
1991 *Marketing político : elecciones 1990*. Lima : Centro de Investigación de la Universidad del Pacífico.

Jochamowitz, Luis
1993 *Ciudadano Fujimori : la construcción de un político*. Lima : Editor Peisa.

Kay, Bruce H.
1996 " Fujipopulism " and the Liberal State in Peru, 1990-1995, *Journal of Inter-American Studies and World Affaires* 38(4) : 55-98.

Kenny, Charles D.
1996 ¿Por qué el autogolpe ? : Fujimori y el Congreso, 1990-1992. En Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 75-104.

Lauer, Mirko
1994 *Días divididos : columnas políticas de los años 90*. Lima : Asociación Laboral para el Desarrollo.

Levitsky, Steven
1999 Fujimori and Post-Party Politics in Peru, *Journal of Democracy* 10(3) : 78-92.

López Jiménez, Sinesio
1991 *El dios mortal : estado, sociedad y política en el Perú del siglo XX*. Lima : IDS, Instituto Democracia y Socialismo.
1992 Del《Fujishock》al《Fujigolpe》: aventureros y políticos en el Perú de los 90, *Quehacer* No. 76 : 24-28.
1993a El régimen fujimorista y sus (monstruosas) criaturas, *Cuestión de estado* No. 2 : 13-17.
1993b Perú, 1992 : de la dictablanda a la democradura, *Quehacer* No. 82 : 35-38.
1993c Perú : golpe, democradura y democracia, *Cuestión de estado* Nos. 4-5 : 28-35.
1994a La contraola autoritaria, *Quehacer* No. 89 : 4-11.
1994b Los partidos políticos : crisis, renovación y refundación, *Cuestión de estado* No. 7 : 31-36..
1994c *Perú, una pista de doble vía : la transición entre el autoritarismo y la democratización (1992-1995)*. Documento IDS (separata de *Cuestión de estado* Nos.8-9), Lima : IDS Instituto de Diálogo y Propuestas.
1995a Estado, régimen político e institucionalidad en el Perú. En Gonzalo Portocarrero Maish y Marcel Valcárcel, eds. *El Perú frente al siglo XXI*. Lima : Pontificia Universidad Católica del Perú, pp. 543-585.
1995b Perú 1995 : transición sin consolidación democrática, *Cuestión de estado* No. 14-15 : 6-11.
2000 El Perú entre el continuismo autoritario y la transición democrática, *Cuestión de estado* No. 26 : 14-21.

Lynch Gamero, Nicolás
1992a *La transición conservadora : movimiento social y democracia en el Perú, 1975-1978*. Lima : El zorro de abajo ediciones.
1992b Mentiras de Fujimori y culpas de parlamento, *Quehacer* No. 76 : 29-33.
1995 Nuevos ciudadanos y vieja política en el Perú, *Socialismo y participación* No. 70 : 79-95.
1996a Los partidos políticos como objeto válido de estudio en el Perú actual, *Socialismo y participación* No. 73 : 31-40.
1996b Suicidio y probables resurrecciones de los partidos en el Perú, *Cuestión de estado* No. 17 : 65-69.
1999 *Una tragedia sin héroes : la derrota de los partidos y el origen de los independientes Perú 1980-1992*. Lima : Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
2000 *Política y antipolítica en el Perú*. Lima : DESCO, Centro de Estudios y Promoción del Desarrollo.

Mauceri, Philip
1995 State Reform, Coalitions, and the Neoliberal Autogolpe in Peru, *Latin American Research Review* 30(1) : 7-37.
1996 *State Under Siege : Development and Policy Making in Peru*. Boulder, Colo. : Westview Press.
1997 The Transition to "Democracy" and the Failures of Institution Building. In Maxwell A. Cameron and Philip Mauceri, eds. *The Peruvian Labyrinth : Polity, Society, Economy*. Pennsylvania : The Pennsylvania State University Press, pp. 13-36.

McClintock, Cynthia
1989 The Prospect for Democratic Consolidation in a 'Least Likely' Case : Peru, *Comparative Politics* 21(2) : 127-148.
1993 Peru's Fujimori : A Caudillo Derails Democracy, *Current History* No. 572 : 112-119.
1994 Presidents, Messiahs, and Constitutional Breakdowns in Peru. In Juan J. Linz and Arturo Valenzuela eds. *The Failure of Presidential Democracy : Comparative Perspectives*. Vol. 1, Baltimore : The Johns Hopkins University Press, pp. 286-321.
1996 La voluntad política presidencial y la ruptura constitucional de 1992 en el Perú. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 53-74.
1999 ¿Es autoritario el gobierno de Fujimori ? En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *El juego político : Fujimori, la oposición y las reglas*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 65-95.

Morse, Richard M.
1982 *El espejo de Próspero : un estudio de la dialéctica del Nuevo Mundo*. México, D. F. : Siglo Veintiuno Editores.

村上勇介
1994a「フジモリとペルー政治」『イベロアメリカ研究』16(1) : 29-44。
1994b「ペルーの政党に関する一考察」『外務省調査月報』No. 2 : 43-67。
1995a「ペルーの1995年選挙に関する一考察」『イベロアメリカ研究』17(1) : 17-34。
1995b「ペルーの大統領選挙と内政――その力学と民主主義「制度」の模索」『国際問題』No. 429 : 38-51。
1997a「第二次フジモリ政権の政治的課題」『外交時報』No. 1337 : 51-66。
1997b「融解する政治「制度」――ペルーとメキシコの事例からの一考察」『民博通信』No. 79 : 74-86。
1998「政治制度の解体？――1990年代ペルーの政治と今後の課題」『ラテンアメリカ・レポート』15(2) : 38-43。
1999「ペルーにおける下層民と政治――1980年代以降の研究の特徴と今後の展開に向けての課題」『地域研究論集』2(1) : 141-179。
2000「迷走するペルー政治――2000年大統領・国会議員選挙とフジモリの辞意表明」『ラテンアメリカ・レポート』17(2) : 2-12。

Murakami, Yusuke
1995 Un análisis de la política exterior japonesa hacia el gobierno de Fujimori: desde la perspectiva interna del Japón. *Agenda internacional* 2(1): 37-52.
2000 *La democracia según C y D: un estudio de la conciencia y el comportamiento político de los sectores populares de Lima*. Urbanización, migraciones y cambios en la sociedad peruana 15, Lima: IEP, Instituto de Estudios Peruanos y JCAS, The Japan Center for Area Studies.
遅野井茂雄
1991 「ペルーの政治変動——フジモリ現象への一接近」『アジア経済』32(9): 21-43。
1993a 「現代の政党——民主化の課題に応えられるか」松下洋・乗浩子編『ラテンアメリカ 政治と社会』ラテンアメリカ・シリーズ1 新評社, 99-114。
1993b 「ペルーの経済改革と政治体制の断絶」遅野井茂雄編『冷戦後ラテンアメリカの再編成』研究双書 No. 433, アジア経済研究所, 203-239。
1993c 「社会変動と政党政治——ペルーを中心に」財団法人日本国際問題研究所編『中南米における民主化の意味と条件』(平成4年度外務省委託研究報告書) 財団法人日本国際問題研究所, 42-52。
1994 「経済改革と民主主義の定着」財団法人日本国際問題研究所編『中南米における民主化の意味と条件』(平成5年度自主研究報告書) 財団法人日本国際問題研究所, 25-32。
1995 『現代ペルーとフジモリ政権』アジアを見る眼91, アジア経済研究所。
1997 「新自由主義下の国家・社会関係——制度構築の課題」小池洋一・西島章次編『市場と政治——ラテンアメリカの新たな開発枠組み』研究双書 No. 482, アジア経済研究所, 25-52。
Palmer, David Scott
1996 'Fujipopulism' and Peru's Progress, *Current History* No. 598: 70-75.
Panfichi, Aldo
1995 The Authoritarian Alternative: 'Anti-Politics' in the Popular Sectores of Lima. In Douglas A. Chalmers, Carlos M. Vilas, Katherine Hite, *et al.*, eds. *The New Politics of Inequality in Latin America: Rethinking Participation and Representation*. New York: Oxford University Press, pp. 216-236.
Panfichi, Aldo, y César Francis
1993 Liderazgos políticos autoritarios en el Perú, *Debates en sociología* No. 18: 227-247.
Panfichi, Aldo, y Cynthia Sanborn
1996 Fujimori y las raíces del neopopulismo. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder: Fujimori 1990-1996*. Lima: Fundación Friedrich Ebert, pp. 29-52.
Paniagua Corazao, Valentín
1992 Las relaciones legislativo-ejecutivo, *Ius et Praxis* Nos. 19-20: 9-149.
Parodi, Jorge, ed.
1993 *Los pobres, la ciudad y la política*. Lima: Centro de Estudios de Democracia y Sociedad.
Pardo Segovia, Fernándo, ed.
1996 *Promoción de la democracia en el sistema interamericano*. Lima: CEPEI, Centro Peruano de Estudios Internacionales.
Pásara Pazos, Luis Humberto
1988 La 'Libanización' en democracia. En Luis Pásara y Jorge Parodi, eds. *Democracia, sociedad y gobierno en el Perú*. Lima: Centro de Estudios de Democracia y Sociedad, pp. 17-52.
1994 El ocaso de los partidos. En Augusto Álvarez ed. *El poder en el Perú*. Lima: Editorial Apoyo, pp. 33-49.
Pease García Yrigoyen, Henry
1994 *Los años de la langosta: la escena política del fujimorismo*. Lima: Instituto para la Democracia Local.
1999 *Electores, partidos y representantes: sistema electoral, sistema de partidos y sistema de*

gobierno en el Perú. Lima : Pontificia Universidad Católica del Perú.
Planas, Pedro
1992 *Rescate de la constitución*. Lima : Abril Editores & Impresores S. A.
1996 ¿Existe un sistema de partidos en el Perú ? En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 169-201.
2000 *La democracia volátil : movimientos, partidos, líderes políticos y conductas electorales en el Perú contemporáneo*. Lima : Friedrich Ebert Stiftung.
Quijano, Aníbal
1995 *El Fujimorismo y el Perú*. Lima : Seminario de Estudios y Debates Socialistas.
Revesz, Bruno
1996 El ocaso del sistema de partidos en la escena electoral peruana, *Revista mexicana de sociología*, 58(1) : 77-95.
Roberts, Kenneth M.
1995 Neoliberalism and Transformation of Populism in Latin America : The Peruvian Case, *World Politics* No. 48 : 82-116.
1998 *Deeping Democracy ? : The Modern Left and Social Movements in Chile and Peru*. Stanford : Stanford University Press.
Rochabrún, Guillermo
1994 ¿Crisis de representatividad ? ¿ O crisis de intermediatión ? *Cuestión de estado* No. 7 : 10-14.
Rospigliosi, Fernando
1992 Las elecciones peruanas de 1990. En Rodolfo Cerdas Cruz, Juan Rial y Daniel Zovatto eds. *Una tarea inconslusa : elecciones y democracia en América Latina 1988-1991*. San José, Costa Rica : IIDH, Instituto Interamericano de Derechos Humanos-CAPEL, Centro de Asesoría y Promoción Electoral, pp. 345-388.
1994 Democracy's Bleak Prospects. In Joseph S. Tulchin and Gary Bland eds. *Peru in Crisis : Dictatorship or Democracy ?* Boulder, Colo. : Lynne Rienner Publishers, pp. 35-61.
1996 *Las fuerzas armadas y el 5 de abril : la percepción de la amenaza subversiva como una motivación golpista*. Documento de trabajo No. 73, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.
Rubio Correa, Marcial
1992 Origen de la crisis del régimen democrático. En Eduardo Ferrero Costa, ed. *Proceso de retorno a la institucionalidad democrática en el Perú*. Lima : CEPEI, Centro Peruano de Estudios Internacionales, pp. 25-30.
Rudolph, James D.
1992 *Peru : The Evolution of a Crisis*. Westport, Conn. : Praeger.
Rueschemeyer, Dietrich, Evelyne Huber Stephens and John D. Stephens
1992 *Capitalist Development and Democracy*. Chicago : The University of Chicago Press.
Sagasti, Francisco, and Max Hernández
1994 The Crisis of Governance. In Joseph S. Tulchin and Gary Bland eds. *Peru in Crisis : Dictatorship or Democracy ?* Boulder, Colo. : Lynne Rienner Publishers, pp. 23-34.
Salcedo, José María
1990 *Tsunami Fujimori*. Lima : Editorial Brasa S. A.
1995 *Terremoto : ¿por qué ganó Fujimori ?* Lima : Editorial Brasa S. A.
Salmón, Jorge
1994 *Entre la vanidad y el poder : memoria y testimonio*. Lima : Editorial Apoyo.
Sánchez, Juan Martín
1996 Perú chino a chino : discusíon inicial en torno al líder populista y la nueva política, *Socialismo y participación* No. 75 : 93-106.
Schmidt, Gregory D.
1996a Comportamiento electoral estratégico : la fuerza oculta en el Tsunami. En Fernando

Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 203-249.

1996b Fujimori's Upset Victory in Peru : Electoral Rules, Contingencies, and Adaptive Strategies, *Comparative Politics* 28(3) : 321-354.

1999 Crónica de una reelección. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *El juego político : Fujimori, la oposición y las reglas*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 97-130.

Stokes, Susan C.

1995 *Cultures in Conflict : Social Movements and the State in Peru*. Berkeley : University of California Press.

1996a Peru : The Rupture of Democratic Rule. In Jorge I. Domínguez and Abraham F. Lowenthal, eds. *Constructing Democratic Governance : South America in the 1990s*. Baltimore : Johns Hopkins University Press, pp. 58-71.

1996b Reforma económica y opinión pública en el Perú, 1990-1995. En Fernando Tuesta Soldevilla ed. *Los enigmas del poder : Fujimori 1990-1996*. Lima : Fundación Friedrich Ebert, pp. 331-354.

1997 Democratic Accountability and Policy Change : Economic Policy in Fujimori's Peru, *Comparative Politics* 29(2) : 209-227.

Tanaka Gondo, Ricardo Martín

1995 La crisis de representación de la sociedad peruana y la importancia en el análisis del " plano individual " : una revisión crítica de alguna literatura de la primera mitad de los noventa, *Estudios sociológicos* No. 38 : 421-432.

1996 La democracia en el Perú de los años 80 y el《Fujimorismo》: reseña crítica de algunas publicaciones peruanas recientes, *Nueva sociedad* No. 146 : 181-189.

1998 *Los espejismos de la democracia : el colapso del sistema de partidos en el Perú, 1980-1995, en perspectiva comparada*. Ideología y Política No. 9, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

1999 *Los partidos políticos en el Perú, 1992-1999 : estabilidad, sobrevivencia y política mediática*. Documento de trabajo No. 108, Lima : JCAS, The Japan Center for Area Studies e IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Tapia, Carlos

1997 *Las fuerzas armadas y Sendero Luminoso : dos estrategias y un final*. Ideología y política 8, Lima : IEP, Instituto de Estudios Peruanos.

Torres Guzmán, Alfredo

1989 *Perfil del elector*. Lima : Editorial Apoyo.

Torres y Torres Lara, Carlos

1992 *Los nudos del poder : una experiencia*. Lima : Desarrollo y Paz.

恒川惠市

1993 「民主主義の意味と条件」財団法人日本国際問題研究所編『中南米における民主化の意味と条件』（平成4年度外務省委託研究報告書）財団法人日本国際問題研究所，4-13。

Tudela Van Breuguel Douglas, Francisco

1993 Orígenes del golpe de estado del 5 de abril de 1992. En Beatriz Ramaciotti, ed. *Democracia y derechos humanos en el Perú de los 90 : los nuevos retos*. Lima : Instituto de Estudios Internacionales, Pontificia Universidad Católica del Perú, pp. 57-78.

Tuesta Soldevilla, Fernando

1995 *Sistema de partidos políticos en el Perú, 1978-1995*. Lima : Fundación Friedrich Ebert.

Valentín, Isidro

1993 Tsunami Fujimori : una propuesta de interpretación. En Gonzalo Portocarrero Maish, ed. *Los nuevos limeños : sueños, fervores y caminos en el mundo popular*. Lima : Sur, Casa de Estudios del Socialismo y Tafos, Talleres de Fotografía Social, pp. 95-114.

Vargas Llosa, Álvaro

1991 *El diablo en campaña*. Madrid : El País/Aguilar.
1993 *La contenta barbarie : el fin de la democracia en el Perú y la futura revolución liberal como esperanza de la América Latina*. Barcelona : Editorial Plantea, S. A.
Vargas Llosa, Mario
1993 *El pez en el agua : memorias*. Barcelona : Editor Seix Barral.
Vega Centero, Imelda
1993 *Simbólica y política : Perú 1978-1993*. Lima : Fundación Friedrich Ebert.
Vidal, Ana María, coord.
1993 *Los decretos de la guerra : dos años de políticas antisubversivas y una propuesta de paz*. Lima : IDS, Instituto Democracia y Socialismo.

インタビュー
A　フジモリ政権の首相経験者（1992年９月18日，リマ）。
B　元与党（カンビオ90）下院議員・下院書記経験者（1992年６月14日，リマ）。
C　フジモリ大統領に近い筋（1992年５月21日，リマ；1998年４月８日，リマ）。